

相模湾の深海生物サンプリング結果について
-生きたままの深海生物を「シャトルエレベータ」により初めて捕獲に成功-

独立行政法人海洋研究開発機構（理事長 加藤 康宏、神奈川県横須賀市）は、平成17年度深海調査研究有人潜水調査船「しんかい6500」調査潜航、「YK05-15航海」（平成17年12月6日～13日、首席研究者：極限環境生物圏研究センター 三輪 哲也 グループリーダー）において、相模湾に面して位置する水族館（新江ノ島水族館・京急油壺マリパーク）と共に、相模湾深海において深海生物のサンプリングを行いました。

深海生物サンプリングは、生存捕獲するための特殊水槽「ディープアクアリウム」（[写真-1](#)）や「シャトルエレベータ」（[写真-2](#)）等を用いて行い、エゾイバラガニ14個体（[写真-3](#)）、ムラサキヌタウナギ3個体（[写真-4](#)）、ヘビゲンゲの一種1個体（[写真-5](#)）、深海エビ2個体（[写真-6](#)）、シロウリガイ30個体（[写真-7](#)）、ヒバリガイ25個体（[写真-7](#)）、サガミハオリムシ15個体（[写真-8](#)）、アレイシア（スパゲッティーチューブワーム）2塊（[写真-8](#)）を生存捕獲しました。このように一回のサンプリングで大量かつ効率的に深海生物を捕獲した例は国内で初めてです。なお、これらの生物は、新江ノ島水族館（館長 堀 由紀子、神奈川県藤沢市）ならびに京急油壺マリパーク（館長 樺澤 洋、神奈川県三浦市）にて長期飼育に向けた実験飼育を展示しながら行われます。

問合せ先

海洋研究開発機構

極限環境生物圏研究センター 研究推進室長 榎木暢雄 Tel 046-867-9600

グループリーダー 三輪 哲也 Tel 046-867-9676

経営企画室 報道室長 大嶋 真司 Tel 046-867-9193

写真1：「ディープアクアリウム」（保温保圧型深海生物捕獲飼育システム）

手前にある球状の耐圧水槽に深海生物を深海環境のまま捕獲し、深海から持ち帰る。後ろの箱型の生命維持装置で水槽内の温度、圧力、酸素濃度などをコントロールし、球状の耐圧水槽にいる深海生物を飼育する。

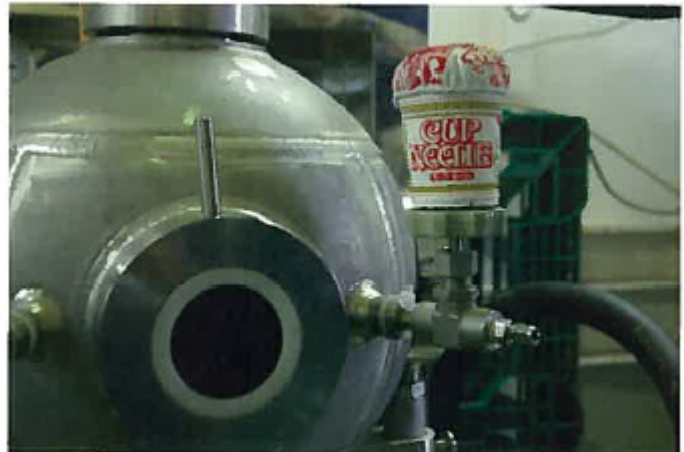


写真2：「シャトルエレベーター」

潜水調査船しんかい6500を補助する資材輸送システム。資材を運ぶカーゴ部分と、浮力を付けるための係留系とからなる。係留系は9個の浮きが付いた25mのロープである。写真は、海底設置に向け船上作業中の「シャトルエレベーター」と、深海1180mに設置したシャトルエレベーターのカーゴ部分



写真3

相模湾深海海底に広く分布するエゾイバラガニ。設置場所に関わらず、シャトルエレベーターに上ってくる。



写真4

ムラサキヌタウナギ



フィッシュトラップに入ったムラサキヌタウナギをしんかい6500のマニピュレータを使いシャトルエレベータに入れた。(向かって左下の写真)

船上に引き揚げたムラサキヌタウナギ (向かって右下の写真)



写真5

船上に回収したヘビゲング (向かって左側)



写真6
深海エビ



写真7
水深 910m にいた化学合成共生生物。採捕したのは褐色のヒバリガイと、白色のシロウリガイ。

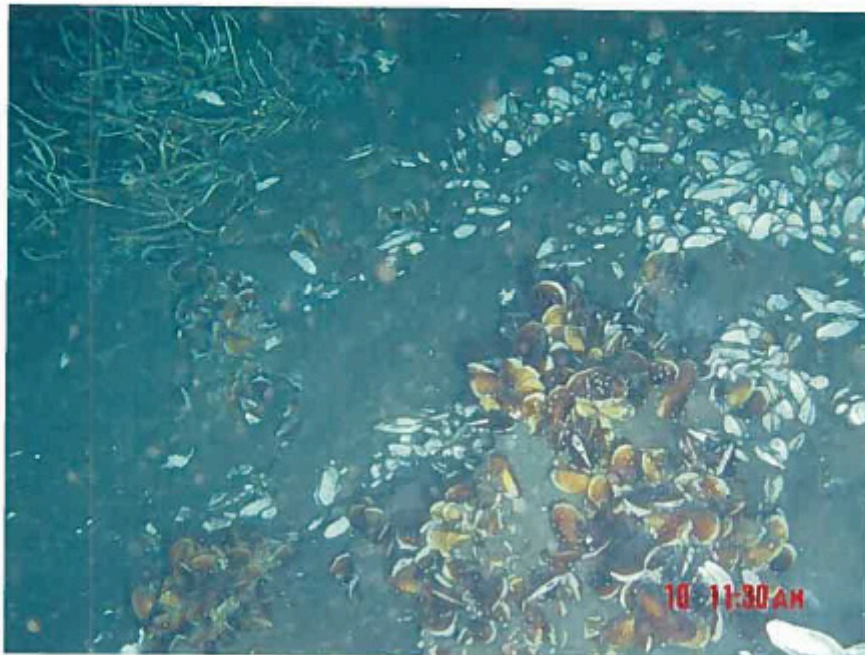


写真 8

水深 850m のチューブワーム (ハオリムシ)。直立し、えらを広げるサガミハオリムシと、スパゲッティのように管を絡めあうアレシア (スパゲッティチューブワーム)。

